即ち実験二が実験一或いは三と比較して明らかに差があると認められたのは次の二点である。

(1)β場面における子供の結合状態の差　これは、表Ⅲ及びⅣに欠られるようにβ場面でA群とB群の子供が一緒になって遊ぶことは、実験二お場合が一番少い。即ち、遅れて入って来る子供が同じような幼稚園経験年数をもつ子供であれば、前からいる子供と一緒になって遊ぶことができるが、経験年数が違う場合には、二つの群は夫々別個に遊んでいる。実験一と二、二と三の間の差は統計的に有意である。一年児の三グループ間、二年児の三グループ間の結合関係は表Ⅱに示したように差がない。

(2)争いの数と群の関係　表Ⅵに示すように、β場面における争いはA群とB群の間に多く見受けられた。「争いの回数」が少ない為に統計的検定は不可能であるが、見たところ、実験一と二、一と三の間に差が認められ、二と三の間には差がない。従って、このことから子供の幼稚園経験年数が長い程、争いの回数が多くなることがわかる。しかし、一年児が遊んでいる所へ二年児が入って来たことによって一年児が二年児からどんな圧力をうけるかは、この実験から結論できない。それには実験二の逆、即ち、二年児の中へ一年児を入れる実験を付け加えなければならない。

(2)三つの実験に共通して見られることは、争いの数は遊具の種類によって異なることである。表Ⅴに示されるようにトロッコが一番多く、滑り台、ブランコ、ジャングル・ジムの順となっている。この順席は子供の興味の順序にも一致した。

四、今後の問題(省略)

家庭に於ける保育知識をめぐる問題点

名城大学　田中一成

Ⅰ、調査の意味…①今日保育機関は全国的に不足している。又たとえ充分に存在するとしても教育の場としての家庭の意義は弱まるものではないこと。

②然るに家庭保育の中心者は主として母親であるが、母親の保育知識とその技術は不充分であると見られる事。

以上から次の二つの点について調査研究して見たものである。

Ⅱ　家庭に於ける保育の困難点

家庭教育上困難を感じている所を質問して　①躾、②健康教育、③性格教育、④経済関係、⑤遊びの場……の順となっている。(頁の都合により表省略)

又第二表に於ては躾の点を調べて　①我儘、②兄弟けんか、③偏食、④甘える、⑤お片付けが出来ない……の順となっており、(頁数の都合により表省略)これら各項の保育困難の訴えはその原因を三つの面に分析が出来る。①は生活環境が悪い。買ぐせ②は幼児の発達過程を親が承知していない(反抗)。③は親の愛情を科学的に処理出来ない(我儘)。そして第三の点による困難が最も強く現わ

第五表（質　問　紙——頻　数）

種別＼年令	1:0	1:6	2:0	2:6	3:0	3:6	4:0	4:6	5:0	5:6	6:0	6:6	7:0	7:6	8:6	8:6
離乳	2	2	5	3	**14**	7	3	4	3							
匙の使用			2	5	**14**	6	8	3	2	0	0	1				
箸で食べる				6	**13**	2	**15**	3	8	3	1	1				
食事のあいさつ					2	2	**7**	0	1	2	3	0	3	1	1	5
こぼさず食べる					1	9	**12**	5	7	3	5	3				
小便の自立					2	**13**	**13**	6	9	2	1	1				
大便の自立					1	7	**16**	**1**	9	6	2	1	0	2		

第六表　20代：30代：40代＝1：1.7：0.5（被調査者実数の比）

年令＼困難個数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
30代	2.8	1.96	2.0	1.33	1.47	1.33	1.29	1.66	0.81	0.75	0.83	0.80	2.0	2.0	1.33
20代	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
40代	0.3	0.3	0.3	0.36	0.52	0.29	0.35	0.5	0.36	0	0	0.2	0	0	0.2

れている。即ち農村と都市の別なしに我儘で困っている事が一番多いのがそれを示している。

初の子の保育上困ったり失敗した事実については、健康管理と躾教育に大別され、両者の比は六対四の割となっている（頁数の都合により表省略。）ので、若い母親としては乳幼児の健康管理はかなり困難が感ぜられているのである。この点は日本の乳幼児の死亡率が外国に比べて高い事やその死亡原因が、乳幼児の病気についての知識の不足に依るものと考えられるものの多い事からも裏付けられるのである。

次に躾の面では特に著しいのが甘やかしから生ずる我儘や依頼心の強い事である。—（初の子であるからでもあろうが）—。又これと反対に教育に熱心なあまり、叱り過ぎから内気な、劣等感を持った、又反抗的な子供にしたとの訴えも見られる。従って躾のむづかしさが甘やかし過ぎず、厳し過ぎぬ中間の度合のむづかしさとして表現されていると思うのである。（マカレンコとニイル）

第五表の如く基本的生活訓練についても、多くの面で水準を下廻る状況を示しており、問題を胎んでいると思う。

第六表に於ては母親の年令層としつけ困難（第二表による）との関係を示している。即ち第二表に困難を表明した母親達の年令を二〇代、三〇代、四〇代の三層に分けると、全体として二〇代に多いばかりでなく、困難個数の多いものほど二〇代に集中しているのである。即ち全回答者の実数比は二〇代を一とすれば、三〇代が一・七、四〇代が〇・五となり、各困難個数に於ける各年令の比を算出すると、第六表の様になるので以上の事が言えると思うのである。

以上の点について学歴別調査の結果は明確な答は得られなかったのである。

（二）

（二〇代―一九三人、三〇代―三三三人、四〇代―九八人）

以上の様に家庭に於ける保育上困難とされる点は経験の浅い若い母親を中心として、乳幼児の健康管理の知識や技術と、及び躾の点では基礎的生活訓練と、甘やかし厳格の度合の知識技術の点を中心として困難な点が画き出されたのである。

Ⅲ、保育教育については如何なる教育が効果があるかについて。

第一の問題点からその教育は何時、如何なる方法で実施すれば最も効果的であるか。第七表は家庭教育の知識を何処で得たいか、と設問二〇項目に分けその希望項目を選ばせた結果である。（頁数の関係により省略）即ち都市と農村とではその選択項目が異っている。都市の母親は①ラジオ、②教育委員会主催の講演、③新聞の家庭欄、保健所と婦人雑誌……農村では①中学卒業までに　②保健所　③新聞の家庭欄　④ラジオ　⑤教育委員会の講演と高校の家庭科……の順となっている。農村が都市と大きく相違する所は、母親となる前に何らかの知識を得たいと言う事。中卒前に得たいと云うものが最高数であること。高校の家庭科や青年団や青年学級の活動に期待している事で、これは生活の多忙を物語るものであり、一家の主婦として、又嫁の立場として保育知識を得る時間的余裕の生み出せない事を物語っている。

農村に比較すれば、都市の母親はやや時間的に余裕が認められるけれども、然し商家の主婦は自分の自由になる時間を充分には持っていない様である。（頁数の都合により表省略）右の調査で社会学級の利用はかなり関心が薄く、ラジオや新聞の利用希望者は都市農村共に多いのであるが、これらの希望は現在充分には満されていない様である。実状を見るとラジオではNHKではシリーズ的に幼児教育の知識を普及する番組はない。又新聞の家庭欄は新聞社によってその傾向が偏よっていて、母親の保育知識の不足を補うには充分なものではない。教育委員会も婦人雑誌も亦然りである。又保健所の活動は最も望ましい活動の一つであるが、この活動が予算にしばられてあまり活発でない事と、利用者の利用度の不充分な点が指摘される。従って各方面の協力が要請されなければこの問題は解決されないと思う。

故に結論としては　①現代社会の貧困性から、唯一つの

二〇代＝二五六人
三〇代＝三七三人
四〇代＝一一五人

第九表（質　問　紙――頻　数）

地域別	方法別	Ⅰ講師のお話のみ 20代	30代	40代	計	Ⅱ講師のお話と質問 20代	30代	40代	計	Ⅲ映画・スライド 20代	30代	40代	計	Ⅳ参観・観察 20代	30代	40代	計	合計
農村部	津田保一	3	3	2	8	8	17	8	33	2	8	4	14	6	11	6	23	78
	吉田保一	12	8	5	25	18	23	13	54	10	6	4	20	8	12	4	24	123
都心部	花崎保一	9	15	10	34	21	34	7	62	8	23	7	37	19	37	5	61	187
	花園幼一	7	13	4	24	36	51	12	98	13	19	1	23	34	40	8	82	233
	名塚幼一	5	6	3	14	16	21	6	43	3	9	2	14	18	22	4	44	115
計		36	45	24	14	99	145	46	290	36	61	18	115	85	122	27	208	746

修得方法に放任さるべきではなく、各種の方法がとられ、利用する母親達が自分の生活環境の中から可能な方法を選んで利用する以外に道はないと思われる。②母親は多忙で家を空けられぬ者が多いから、空ける方法を、開催者側と家庭の両方が考える事。③社会学級や母親教室の開催方法としては ①講師のお話と質問、②参観・観察、③映画・、スライド、④講師のお話のみ、の順となっている。これは年令別、学歴別に於て共に同一結果となっているが、但し、学歴別では中等教育以上の者は、ⅡとⅣに多くの希望があり、小卒、高等小卒の者はⅠとⅢに希望が多い点は注目すべきで、低い学歴者は全国的に多い事を考え、又昨年愛知県社会教育課の調査で青年学級の開催方法とし、映画方式が第一位の効果を挙げている事を考え合せて、今後より多くの保育映画が製られ、映画方式を中心とする啓蒙が盛になる事が希ましい様に思うのである。

幼児の偏食に関する総合的研究

国立精神衛生研究所　玉井収介
東京家政大学　副田澄子
東京家政大学　鈴木典子

Ⅰ　研究の目的

この研究は、幼児の偏食に関して、心理的身体的両面から総合的に研究しようとしたものである。従来のこの種の研究が、ややもすれば、小児医学または心理学それぞれの領域から別々に研究されていた傾向があるのにかんがみ、われわれは、心理学（国立精神衛生研究所、玉井収介）、小児医学（東京医科大学、山県信弘）、精神医学（東京医科大学、加藤正明）の三者の緊密な協同によって研究をすすめた。

われわれは、この研究において偏食児を次の如く定義した。

i　ある食品を一定度以上嫌い、または好むこと、（絶対に食べない、または、それがあれば、他のものは一切たべない）

ii　ある期間、少くも一年以上つづくこと。

iii　拒食、異食、大食、少食などは除く、

iv　以上の条件に該当しても幼児が通常たべないものは除く、

Ⅱ　研究の方法と対象

研究は次の各段階にわかれる。

i　第一回基礎調査、対象となる偏食児及び対照群となる正常児の撰抜、および分布、食品内容、家族の偏食その他の調査を目的とする。

ii　第二回調査

第一回調査によりえらんだ偏食児群と対照群に対し、幼少時からのしつけ方に関する調査と、三日間の献立表を記入してもらっての栄養調査を行った。

iii　小児科学的検査

つづいて、両群のうちから、それぞれ若干名をえらんで、小児科学的諸検査を行った。その内容は、身体計測、体力測定、体質、罹